

オースティンとギヤスケルの作品における メリトクラシー

—異なる階級間の結婚を中心に—

波多野葉子

はじめに

オースティンとギヤスケルの時代には、社会基盤が農業から商工業へと変化するに伴い、覇権が地主階級から資本家へ移行した。そのような状況を反映した二人の作品では、出自や家柄を重視する社会から能力を重視する実力主義社会^{メリトクラシー}へと変遷する過程が様々な形で映しだされている。もともと英国には「取り除くことのできる不平等」(Briggs 106)が存在しており、労働者階級から地主階級に出世して爵位を得る者がいる反面、地主階級から没落していく者もいた。そうした浮き沈みの場面には、多額の持参金をつけて娘を没落しつつある地主階級に嫁がせ、出世の足固めをする資本家の姿や、その反対に富を蓄えたブルジョアジーに地主階級から嫁いで、実家の窮状を救うジェントル・ウーマンの姿が見られた。オースティンとギヤスケルの作品では様々な異なる階級間の結婚が描かれているが、オースティンの場合は伝統的なシンデレラ・プロットの他に、ジェントリーの娘とプロフェッショナルとの結婚が多い。一方、ギヤスケルの場合にはプロフェッショナルとの結婚に加え、実業家との縁組も描かれている。本稿では、両作家の作品における異なった階級間の結婚に焦点を当て、その変化の中に社会がメリトクラシーの時代へと変遷する様を探ってみたい。そして、共に正式な出版は1859年であるが、ヴィクトリア朝中葉に大きな影響を及ぼしたサミュエル・スマイルズの『自助論』(Self-Help)が唱導する自助の精神とチャールズ・ダーウィンの『種の起源』(On the Origin of Species)に代表される進化論が、ギヤスケル作品中の異なる階級間の結婚にどのように反映されているかを考察する。

1 オースティン作品における異なる階級間の結婚

家柄が劣るジェントリーの女性の出世物語—伝統的なシンデレラ・プロット

オースティンは限られたジェントリーの生活しか描かなかったとされるが、田園世界を舞台に異なる階級間の結婚を数多く描いている。それは、当時の社会の身分制度が必ずしも固定化したものではなく、ある程度流動的であったことと、そうした中で社会全体の力関係が変化していった様を物語っている。こうした異なる階級間の結婚として真っ先に挙げられるのは、女性が由緒あるカントリー・ハウスの夫人となる出世物語である。その好例は『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813)で、エリザベス・ベネットとダーシーは共に地主階級とはいえ、両家には歴然たる階級差が存在し、それが二人の当初の誤解の原因となっている。経済的に見れば、ベネット氏の年収が2,000ポンドであるのに対し、ダーシーの壮大な屋敷ペンバリーは1万ポンドの年収を生み出す。社会的にもダーシー家は爵位がないとはいえ、「立派で誉があり、かつ歴史のある」(McMaster 117) “地主 紳士階級 landed gentry”であるばかりか、母は準男爵家の出身である。かたやベネット家は、夫人がプロフェッショナル・クラスの出身で、商業に従事している兄を持ち、それが同家の娘達にとり良縁の障害であることは、ダーシー自らが語っている。従って、社会的にも経済的にも格が上のダーシー家との縁組はエリザベスにとり出世であることは間違いない。特にベネット家には男子がおらず従兄弟が相続するため、彼女は未婚のままであれば父の死後に屋敷から追い出される身の上である。それを考えれば、壮麗な屋敷の奥様に収まるこの結婚は望外の出世と言えよう。それは、限られてはいるが身分の流動性を許容するイギリスの階級制度と、その産物とも言えるジェントリー同化願望とを反映したものになっている。¹

オースティンの作品には貴族はあまり描かれていないし、描かれているとしてもレディー・キャサリンのように傲慢な場合が多い。それに対し、ダーシーのような爵位のない地主階級は優れた地主として描かれている。富と血筋に恵まれてはいるが、無冠の“Mr”が名誉の印であったダーシーは、オースティンの時代における田舎のジェントリーの重要なグループを代表しており、彼の爵位のない状態はかえって最高の荣誉でさえありうる。実例としては、新農法で業績を残した

Thomas William Coke は 1776 年に 1 万 2 千ポンドを相続し、1816 年には収穫を 3 倍に増やしたが、この間に 2 度叙勲を辞退している。この背景には 1688 年以降、新参の貴族が増加したことへの反発が見え隠れしている。従って、単なる“esquireship”^{郷紳の身分}の方が腐敗や政治的追従とは無縁なことが暗示されている (Keymer 392)。こうした背景はダーシーとの結婚でエリザベスは「玉の輿」に乗ったことを再確認させる。

ナイトリー家もこの範疇に属するチューダー朝からの旧家である。一方、所有地が少ないにもかかわらずエマ・ウッドハウスが 3 万ポンドの遺産を相続することは、同家の資産が投資によるものであることを示唆しており、両家間の家格の差は一目瞭然としている。ケイマーは「所有地が比較的少ないことと、資本に依存している点で、ウッドハウス家の地位は現金に依存するプロフェッショナル、不労所得生活家族という広い範疇—つまり、デイヴィッド・スプリング (David Spring) が〈擬似紳士階級〉(‘pseudo-gentry’) と呼ぶ土地からの富に頼らない範疇に近い」(394)、と述べている。従って、ハイベリー での歴史が比較的浅く、現金に依存するウッドハウス家のエマは、擬似紳士階級から「地主紳士階級」(“landed gentry”) の旧家に迎えられるのである。“^{財産}property”と“^{礼儀正しさ}propriety”が同語源であることが示すように、少々礼儀正しさに欠けていたエリザベスもエマも、カントリー・ハウスの夫人として財産を得て礼儀正しさを身につけるという出世物語は、出自や家柄のもつ伝統的価値が健在であったことの証左であろう。

プロフェッショナルとの結婚

オースティンの作品には地主紳士階級との結婚の他にプロフェッショナルとの結婚も描かれているが、中でも地主階級のヒロインがプロフェッショナル、特に国教会牧師や海軍軍人と結ばれる『マンズフィールド荘園』(*Mansfield Park*, 1814) や『説得』(*Persuasion*, 1817) 等は、社会が専門職によるメリトクラシーへと移行する過程を反映し、社会で徐々に出自よりも専門的能力を持つ人々の重要性が増大する様を物語っている。

国教会聖職者、法律家、軍人などのプロフェッションは、長子相続制により遺産相続を阻まれた次男以下の男子が就くジェントルマンの職業であった。彼らにはオースティンの兄のようにジェントリーの親戚の養子になることもあった

が、多くは自力で生き抜く術を身につける必要があった。次男以下の息子と娘の遺産相続権を認めない長子相続制は、常に経済的に困窮する可能性のある子供達を生み出す可能性を孕んでいたのである。こうした事情から、18世紀後半、学識を必要とする伝統的な職業である聖職、法曹、医師は、陸軍および海軍と共に社会的にも経済的にもジェントルマンに相応しい職業として、次男以下の男子が好む職業となっていくた (Southam 366)。陸軍は貴族に好まれ、海軍は名声と富を与え、法曹界は収入の高さと政界での有用性により人気があった。また国教会は報酬と地位の点で順調に伸びていた。1813年頃、聖職はプロフェッションの中で首位に立っており、法曹界のみが聖職界と競える立場であったが、法学のみならず、医学や工学、また同じような職業がまもなく正規なものとして能力主義になり、さらに聖職界を除いて組合も結成されていく。その結果、他のプロフェッションは聖職を凌ぐようになっていった (MacDonagh 18)。ただし、医学界では、ジェントルマンの職業として認められていたのは、王立内科医カレッジ (Royal College of Physicians) のフェローのみであった (Southam 366)。こうした専門職のなかで何を選ぶかは、コネや愛顧が幅を利かせていたため、家伝来の職業を選ぶことが多かったという。長男以外の男子は法律や軍の他にも資金を与えられてビジネスを興したり、愛顧で政府の役職を得る道もあった。また、ジェントリーの生まれではないが才能のある者が、こうした専門職に就いてジェントルマンに出世することも可能であった。

前述の D. スプリングが名付けた「擬似ジェントリー」とは田舎に居を構える、聖職者、法廷弁護士、陸海軍の士官等のプロフェッショナルの家族や、引退した不労所得者、大商人などを指す。彼らは近隣に住む地主紳士階級と血縁や社会的繋がりを持ち、同種の望みを抱いているが、基本的な経済事情が異なる。つまり、権力や土地所有により生み出される富を持たず、働いて得た収入に頼っている人達を指すのである (Copeland, *Companion to Jane Austen* 132、以後 *Companion* と略記)。彼らの特徴として、本来のジェントリーの暮らしぶりを真似て、ジェントリーへの同化願望を持つ点を挙げることができる (Keymer 394)。

オースティンの作品には、こうした擬似ジェントリーの結婚が数多く描かれており、そうした結婚を通し社会の権力構造が変化していく様子が映し出されている。オースティンの生きた時代は、ナポレオン戦争がもたらした富で大きな社会

変化が起こっていた。予想もしない人々が出世の階段を金の力で登っていった (Copeland, *Companion* 143) が、登る人がいれば転落する人が出るのは必然であり、生まれた身分から下の身分に落ちることも多々あった。女性にとっては結婚が身分の流動性をもたらす大きな要因であり、まさに伴侶の選択は人生を支配する問題であった。女性は限嗣相続により遺産相続が叶わず結婚が唯一の生きる道であったため、独身の場合はさらに不安定な将来が待っていた。とはいえ、誰もがエリザベスのようにカントリー・ハウスの夫人に出世できるわけではない。従って、オースティンは将来を託す相手として擬似ジェントリーのプロフェッショナルを選ぶ場合も描いているのである。

まず国教会牧師と結婚する例が『マンスフィールド荘園』に見られる。ファニー・プライスは父が海軍軍人であるためプロフェッショナルの家庭の出身であるが、準男爵家の次男と結婚して牧師夫人となる。プライス家の年収は 400 ポンドに近く、ノリス伯母であったら十分切り盛りできる額であった (Copeland, *Jane Austen in Context* 323, 以後 *Context* と略記)。しかし、母親の低い家計管理能力と父親の飲酒癖により、同家は貧しいプロフェッショナルの家庭となっていた。かたやエドモンドは次男とはいえ準男爵家の出身である。長男の散財がもとでサー・トマスがマンスフィールドの聖職禄を売却したため、エドモンドはソントン・レイシーの牧師になる。しかし、グラント博士の死後はマンスフィールドの教区牧師となる可能性が強い。国教会牧師は田園社会では中心的役割を担っており、地主と並んで田園の階層社会の頂点に位置していたこと (Southam 368) と、国教会聖職者は伝統的に地主階級の次男以下が継ぐ地位であったことを考えると、この結婚はファニーにとり大きな出世であろう。ことにバートラム家は地主階級に求められる伝統精神を失ってしまい、長男が家を継ぐ器量に恵まれていないため、ファニーがエドモンドと協力し、いわばマンスフィールドの精神的相続人として同家の伝統的な精神遺産を継承していくことが期待される。

『分別と多感』 (*Sense and Sensibility*, 1811) のエリナー・ダッシュウッドは、長男でありながら勘当され、ブランドン大佐の所領の牧師となるエドワードと結ばれる。実家のノーランド・パークは父の叔父が幼い甥に限嗣相続権を与えたが、もとより長子相続制のもとではエリナーには実家の遺産相続権はない。豊かなジェントリーの生活に慣れた後に、デヴォンシアではわずか 500 ポンドで一家の

生計を立てねばならないエリナーにとって、伝統的に地主階級の次男以下の職業であった国教会聖職者との結婚は、ノーランド時代の豊かさは望めないにしろ、まずまずの良縁と言えよう。「国教会聖職者は貴族制度の最も変わることのない擁護者」(Perkin 255)であり、聖職者と地主は不可分の関係であったため、フェニー同様にエリナーは田園の共同体の頂点に立つのである。

『説得』では、準男爵家の次女アンは海軍軍人と結婚し、身分が下降する。チャールズ二世の王位復帰時の手柄への褒賞として準男爵に叙せられたエリオット家は、17世紀中葉には連続して三度議会で代表権を獲得している(Roe 361)。かたや、1806年に19歳のアンと23歳のウェントワースの婚約が破談になった時、彼はケリンチ近隣の副牧師の弟で、知性に溢れ、意気盛んで、才気縦横のたいそう立派な若者であったが、まだ軍艦の副長にすぎず、海軍将校としての将来も未知数であった。またとりたてて力のある親類縁者もいなかったため、サー・ウォルターは彼の家柄と将来性への不満からこの縁談に反対し、亡き母の友人でアンが厚い信頼を寄せているレディー・ラッセルもアンにウェントワースを諦めるよう説得したのであった。しかし、二人が再会した8年後にはエリオット家は借金が嵩み、先祖代々の屋敷をクロフト提督に貸すことになる。一方、ウェントワースは姉が提督夫人となっていたばかりか、彼自身も大佐に出世し、ナポレオン戦争での戦いで25,000ポンドの賞金を得ていた。当時、資産は5%の利子での運用が一般的であったので、これは年収1,250ポンドを意味する。サー・ウォルターはナポレオン戦争で財を成した軍人を成り上がり者として軽蔑したが、所領の管理もできず経済的に困窮するサー・ウォルターと比べ、身分は下ながら将来の活躍が期待できる「セルフメイド・マンに近い」(McMaster 121)ウェントワースの資質が優れていることは明白である。また、エリオット家にはベネット家と同様に男子がいないため、父の再婚により男子が誕生しなければ従兄が相続することになる。とすると父の死後、家系は断絶し、娘達はダッシュウッド姉妹のように屋敷から追い出されることが予測できる。それに対し、ウェントワースにはこれからの活躍次第で地位と収入の向上が期待できるのである。

『説得』ではクロフト提督やウェントワースはもとより、ライム・リージスでアンが懇意になるウェントワースの海軍仲間ハーヴィル等の誠実さや海軍での訓練の賜物である創意工夫の才が、サー・ウォルターの軽薄さや虚栄心と対照的に

描かれている。家系に執着するサー・ウォルターが定期的に丹念に読む『デブレット英国準男爵名鑑』(*Debrett's Baronetage of England*, 1808) は、能力主義の『海軍要覧』(*Navy List*) と好対照をなし (Keymer 391)、命を賭け国のために働く海軍軍人が賞賛されている。士官への任官を購入する陸軍 (McMaster 121) と比べ、海軍は「生涯の仕事で、高度な能力が要求され、非常に専門的」 (Southam 374) な職場であった。任官には長期の訓練が必要なばかりか、航海術、地図作成法、造船術など様々な技術が要求された。さらに、大尉資格試験に合格するには少なくとも 6 年の歳月が必要だったが、試験に合格しても必ずしも任官されるわけではなかった。指揮官や船長への昇進は時にはコネが物を言うこともあったが、主に能力次第だったという。このような事情を考えるとウェントワースの昇進は彼の能力を物語っている。アンには実家の相続人である従兄と結婚し、由緒ある準男爵家の夫人となる可能性もあったが、ウェントワースとの結婚により自分が生まれた階級である地主紳士階級から、生まれより才能が物を言うプロフェッショナルと結ばれ、擬似紳士階級の仲間入りをしたのである。彼女は由緒ある家系ではなく、結婚相手の優れた資質に惹かれ、ホームレス・ヒロインとなる道を選んだと言える。

本作品には身分の流動性へのオースティンの意識の高さが反映されている。能力主義の組織としての海軍は、サー・ウォルターがしがみついた世襲制度と対比されているが、「ナポレオン戦争で築いたクロフトとウェントワースの財産は、ウォータールー (1815) 以後の身分の流動性を円滑にする (新しい金) を代表している」 (Roe 361)。ナポレオン戦争は商工業と軍人に成功の機会を与えただけでなく、両分野の指導者の格も上げたのである (Keymer 395)。

このように地主紳士階級と結婚し身分が上昇するエリザベスやエマと異なり、ファニー、エリナー、アンは擬似紳士階級である聖職者や軍人などのプロフェッショナルと結婚する。ヒロインの長所に対する褒美は、前者が伝統的な屋敷や所領、つまり過去の遺産であるのに対し、後者は夫の才能と将来性である。「オースティンは歴史は長いが爵位のない、特に収入を土地と地代から得ている地主階級に深い尊敬の念を抱いているようである。そして、彼女の最も理想的なヒーローであるペンバリーのダーシー氏とドンウェル・アビィのナイトリー氏はこのクラス、つまり地主紳士階級の出身である」、とマックマスターが述べるように (117)、

ダーシー、ナイトリー、それにブランドンが優れた人格を持つことは疑いが無い。オースティンの世界では「屋敷はジェントルマンの徳の提喻」(Ellis 417)であり、「当然な道徳的秩序の象徴」(McAleer 66)である。そして、その所有者には崇高な徳が求められる。とすると、このプロフェッショナルとの結婚にはオースティンの価値観の変化が読み取れよう。お決まりの出世物語から屋敷を持たないプロフェッショナルとの結婚への移行は、オースティンが人間の価値判断の基準を血筋ではなく能力に移したことの証左ではあるまいか。特に、ジェントリーの最高位である準男爵令嬢であるアンが海軍軍人の妻となる『説得』は、土地に価値を置く伝統的社会構造が能力社会へと移行する様を映し出しているのである。このようにオースティン最後の作品である同作品には、作者の価値観の変化が窺え、『高慢と偏見』のシンデレラ・プロットとは180度転換したものとなっている。『説得』には上の階級へと出世するシンデレラではなく、下の階級の恋人の資質を評価し、変わり行く社会を乗り切ろうとするヒロインの姿が映し出されているのである。²

このような異なる階層間の結婚には、社会構造が変化し、身分が変化する社会的地位の流動性 (social mobility) の可能性が示唆されている。たとえ由緒ある大地主の家系に生まれても、男女を問わず下の階級に転落する可能性を孕んでいたし、その反対に生まれが卑しくとも、才能と努力により爵位を得ることも可能であった。女性の場合は身分の変化が結婚により起こることが多かったが、独身の場合はミス・ベイツのようにさらに将来の不安に晒された。従って、配偶者の選択が女性の一生を左右する中で、従来の地主階級でなくプロフェッショナルを相手に選ぶというプロットは、社会の覇権が地主階級からプロフェッショナルへ、すなわち、血筋から能力へと移りつつあることを示している。

2 ギヤスケルの作品中の異なる階級間の結婚

ギヤスケルの作品はオースティンの年代と環境との違いもあって、登場人物の階級が多様である。それを反映して、さらに差が大きい階級の結婚が描かれている。ギヤスケルの時代には産業革命の加速に伴い、起業家や労働者同様、プロフェッショナルも解放されていった。パーキンによると、都市化と生活水準の向上に伴い、医師、法律家、著述家、そして非国教会派を含む聖職者さえも仕事の需要が

増えたことで、少数の富裕層への依存度が減っていった(254)。そして、自分達と同等の身分のクライアントが増えるにつれ自尊心を高めた彼らは、社会からも相応の尊敬を求めるようになっていく。こうした「紳士実務家」(“gentlemen practitioner”)は自分達の地位の向上を目指し、リスペクタビリティを意識し、事務弁護士としての地位の確立を志向したが、それは、1825年には事務弁護士会(Law Society)として結実した。外科医は1800年に王立外科医カレッジ(Royal College of Surgeons)を、また薬剤師は1815年の薬剤師条例(Apothecaries’ Act)により地位の向上を図った。貴族制度に最も依存度が高く、その最たる擁護者であった国教会聖職者でさえ、そうした傾向に影響を受けざるをえなかった。特権に胡坐をかいた能天気な聖職者が多かった18世紀後半と異なり、福音主義運動とオックスフォード運動が聖職の水準、自尊心、独立性を上げる点で大きな力を及ぼしたのである。同時に他のプロフェッションも激増し、伝統的なプロフェッショナルと同様の地位と独立を得るために、土木技師は1818年、建築家は1837年、薬剤師は1841年に組織化されていく。さらに重要なことはプロフェッショナルの知識人の社会的地位の向上であるが、著述家の地位がその最たるもので、ついに著述家が専門職となったのである(Perkin 254-55)。

こうしたプロフェッショナルの重要性が増していく様を、ギヤスケルが感じ取っていたことは想像に難くない。また、コネや恩顧が幅を利かせた任官も競争試験に取って代われ、1854年には官職任官が試験による選考になっている(Davis 27)。この施行に多くの抵抗があったことは、トロロプが『自伝』(*An Autobiography*, 1883)で競争試験を嘆いていることから窺える(34)。しかし、時代の潮流はメリトクラシーへと動いており、1854年設立の人文科学試験協会(Society of Arts Examination Board)はその好例であった。また、トマス・アーノルドはラグビー校で試験に重きを置き、地元の少年達の無料入学を試験の結果に基づいて奨学金を与える方式に変えている(Perkin 258)。

また、スマイルズの『自助論』とダーウィンの『種の起源』が広く受容されたことも、家柄より個人の能力を評価する時代となっていたことを示す。『自助論』は生来の身分は下でも自らの能力と努力により社会で活躍することを奨励した点で、また、進化論は変化する環境に適應できる者が生存するという点で、共に能力主義を内包する思想であった。両著は共に出版は1859年であるが、スマイル

ズは既に 1840 年代にリーズの労働者に対して何回も同じ趣旨の講演を行っている。また、進化論も 1830 年代のライエル著『地質学原理』(*Principles of Geology*, 1830-33) 出版に始まり、1840 年代にはチェンバーズの匿名出版書『創造の自然史の痕跡』(*Vestiges of the National History of Creation*, 1844) が大好評を博すなど、以前から流布していた。実は、種の変容に関する議論は 18 世紀を通してなされており、ダーウィンの『種の起源』は「長い劇の最終幕」であった (Desmond 256)。このような変化の中で、ギヤスケルの描く異なった階級間の結婚が、オースティンとは違って、プロフェッショナルのみならず、自己の才覚で新しい時代に適応して勢力を伸ばす企業家を巻き込むのは自然なことと言える。

まず、『妻たちと娘たち』(1864-65) では、当時はジェントルマンの職業ではなかった医師の娘モリーが、七王国時代からのトーリーの旧家ハムリー一家の次男ロジャーと結ばれる。ロジャーは次男ゆえにハムリー家を継げないが、将来を嘱望される博物学者である。本作品には『マンズフィールド荘園』との類似点が実に多い。両作品ともプロフェッショナルの家庭の娘が、長男の散財や社会の変化に対応できず没落しつつあるトーリー・ジェントリーの戸主にその徳を認められ、存在価値を増していく。そして、共に都市文化の影響を受け、都市志向のライバルに心を奪われていたプロフェッショナルの次男と結ばれる。『妻たちと娘たち』ではハムリー家の長男の遺児が幼いため、ロジャーが同家を支えなければならないが、ロジャー以上に伝統的精神を持つモリーの役割が期待されることも、マンズフィールドと同様である。³

しかし、ロジャーのプロフェッションは新しい時代の幕開けを予感させる博物学であって、エドモンドとは異なる。オースティンの世界では自分で生活の糧を得る必要のあるジェントルマンの息子にとっては、教会、陸軍、海軍、法曹界、そして、ジェンティリティに関しては疑わしい点のある医学の選択肢しかなかった (McMaster 121)。それとは異なり、画期的な学説で社会に衝撃を与えたダーウィンを髣髴とさせるロジャーの人物像には、伝統的な分野以外の才能を評価するギヤスケルの革新性と時代の変化が感じられる。「当時、科学者がイギリスの主導的な知識人であったことを疑うことはありえまい」とベアトリス・ウェブが述べたように、宗教と科学というヴィクトリア朝の主要な論争の勝者である科

学は、知的世界の中心であった（Kucich 213）。本作品の時代設定は1830年前後であるが、当時は進化論確立の前段階で、ラマルク、プリチャード等により、進化に関する研究が活発になされていた。そのような時代の胎動の中で、ロジャーはジェントリーの次男の伝統的な職業を選択せず、先端分野での業績を着々と上げる人物として描かれている。その人物像にはダーウィンの影響が感じられるが、その他にも本作品は旧家存亡にみられる適者生存や、ハムリー家のフランス人の血を持つ跡継ぎの明るい未来など、進化論の影響が現れた作品である。

『ラドロウ卿の奥様』（1859）も進化論の影響が随所に見られる作品であり、さらに階級間の差が広がった結婚が描かれている。まず、グレイ牧師とベッシーの縁組であるが、グレイはオックスフォードのリンカーン・カレッジのフェローであった経歴を持つプロフェSSIONALである。国教会の牧師がれっきとしたジェントルマンであることは既に述べた。かたやベッシーはミス・ガリンドウの昔の恋人の遺児であるとはいえ非嫡出子である。この二人の結婚は「非嫡出子には法的な存在理由を認めない」（189）レディー・ラドロウが君臨する身分社会が、構造、価値観共に変化しつつあることを示している。本作品は時代設定が1806年頃から1814年であり、『説得』の1814年（アンとウェントワースの最初の婚約は1806年）から1815年と重なり合い、異なる時代に生きた二人が同じ時代設定で新時代の到来を予感させる作品を書いたのは興味深い。ただ、プロフェSSIONALの中でも地位の高い牧師が身分の低い非嫡出の女性と結婚するプロットは『説得』よりさらに過激で、家柄の釣り合いより愛が結婚の基準になりつつあることを明示している。

さらに、夫妻の娘が村の教区牧師のハリーと結婚するが、彼は村の無法者の息子で最下層の出身である。そのハリーがれっきとしたジェントルマンの職業である国教会牧師になること自体が、能力による身分の流動性の進行を物語っているが、グレイ牧師の子孫が代を追うごとに、異なる階級間の結婚を重ねて身分の流動性を加速させていく。このいわば異種交配により優れた子孫が生まれ、能力の重要性が増す時代での同家の子孫の活躍を予感させる展開である。それに対し、過去と伝統に縛られ環境に適応できなかったハンベリー家とラドロウ家は9人の子供が全て早世して滅亡する運命となる。これは両旧家が同族婚を繰り返したことを暗示しているが、激動の時代を乗り切るためには停滞した血では敵わず、下

からの上昇志向に燃えた新しい血を取り入れ、能力に恵まれた子孫を生み出す必要があった。

また、バーミンガムでパン屋を営んでいた非国教会徒ブルックが村に土地を購入し農業経営を行うことは、新興中産階級のジェントリー化の好例であるが、そのブルックの娘がハンベリー家の執事となったキャプテン・ジェイムズと結婚し、さらにジェントリー化の度合いを高めていく。ジェイムズはラドロウ家の子息の海軍時代での友人であり、伯爵夫人よりも「教会と君主」(192)よりの人物であることと、ハンベリー家の執事赴任が「彼にとってはへりくだること」(171)と夫人が述べていることから、ジェントリー出身であることが推察できる。ジェントリー出身のプロフェッショナルと商家出身の娘との結婚は、新興中産階級のジェントリー化の過程を余す所なく語っている。同時に身分にこだわらず積極的に新農法についてブルックに教を乞うジェイムズの姿には、自らの力で生きる道を模索する未来志向の資質が現れているが、この能力志向の新旧中産階級の結婚により、新しい勢力が生まれることが予知できる。また、ジェイムズには『説得』のハーヴィルとの共通点も感じられよう。

本作品でギヤスケルは労働者階級にとっての教育の重要性を主張しているが、それは、日曜学校設立のために奔走するグレイ牧師の姿やハリーの牧師叙階に端的に現れている。また、学校設立後は仕事の時間に「道端でたむろする若い衆」(205)が消え、子供達は学校に行き素行が改まったと教育の成果が語られる。ハリーが教育によりジェントルマンに出世したように、出自に関わりなく人間は教育を受け、才能のある人間が社会の指導者になるべきである。そのようなギヤスケルの能力重視の信念が伝わってくる作品であり、適者生存を謳う進化論の影響が随所に表れていると言えよう。

『北と南』(1854-55)はスマイルズの自助の精神を反映していると同時に、階級差による偏見の故に誤解していた二人が紆余曲折を経て互いの立場を理解し結ばれるという点で、『高慢と偏見』との類似点が多い作品である。ただ、階級の設定は産業革命により商工業の重要性がさらに増した時代の変化を映し出したものとなっている。同じジェントリーでも社会的、経済的に劣るレヴェルの女性が、最高級の地主階級に迎えられて壮麗な屋敷の奥様に出世する、いわば『パミラ』(1740)に見られるシンデレラ・プロットを持つ『高慢と偏見』と比べ、『北と南』

では元国教会牧師の娘で、ジェントルマンの娘としての階級意識の強いマーガレットが、優れた資質により労働者階級から工場主になった新興中流階級のソーントンと結ばれるという、ジェンダーと身分が反転する新旧中産階級の結婚である。⁴ ソーントンはスマイルズの自助精神を体現したような人物であり、勤勉、忍耐、不屈の精神で労働者階級から産業資本家になり、イギリスはおろかヨーロッパでも名を知られている。彼はプロフェッショナルではなく「商売人」(“shoppy people” 50) であるが、これも出自より才能を重要視するギヤスケルの姿勢の現れであると同時に、彼女の革新性をも示唆している。また、経済的苦境に陥った後にマーガレットの遺産で事業を再建していくソーントンは、マーガレットと二人でヒギンズを始めとする工具との間に理想的な雇用関係をミルトンで構築していくことであろう。歴史的に、事業が成功した暁には新興中産階級は田舎に屋敷を構えることが多々あったが、ソーントンは工場経営が順調であった時も工場と隣接する家に住んでいる。それに対してマーガレットが驚いた経緯があるが、自分の出自と価値観に誇りを持つソーントンが事業再建後に田園でジェントリー化し、旧来の権力に与する可能性は少ない。それ以上にギヤスケルの脳裏を占めていたものは、妻であり協同経営者でもあるマーガレットの助力を得て新しい人間関係を築き、新時代の生み出した工業都市で活躍していくソーントンの姿であろう。ここには織物業者のタイタス・ソルト (Sir Tutus Salt, 1803-76) が築いた製造業のモデル村ソルティア (Bradley 73-86) の萌芽のようなものが感じられる。二人の結婚は地主紳士階級の娘アンと擬似紳士階級のウェントワースとの結婚をさらに社会的身分では一段階下げ、擬似紳士階級の娘と労働者階級から工場主へと身を立てた男性との結婚となっている。この違いはオースティンとギヤスケルの生きた時代と二人の境遇の差からくるものと思われるが、この女性の階級上の下降には、オースティンもギヤスケルも生まれではなく資質を重要視していたことが読み取れる。

まとめ

このように、オースティンとギヤスケルは異なる階級間の結婚を扱う際に、共に家柄より能力を重んじる結婚を描いている。オースティンの作品には屋敷、地位、収入への直接的な言及があり、身分や宿命が変わる社会の流動性への意識が

感じられる。その背後には、18世紀以降の産業革命による資本家の台頭と地主層の衰退、兄ヘンリーの妻の前夫がギロチンで処刑された世紀末のフランス革命、ナポレオン戦争(1798-1815)など、古い身分制度を基盤とした社会が崩れつつある時代への不安感が存在する。ジェントリーでも特に世の変化に影響されやすく非ジェントリーとの境界にある層を題材に、長男以外の男子や女子に不公平な長子相続制の下で、プロフェッショナルの世界に希望を託し懸命に生きる人々を描いているのである。⁵これはとりもなおさずオースティン本人を含む、オースティン家の問題でもあったはずである。オースティンの作品は静かで波が立たない世界を描いているように見えるが、実は生存策を求めて苦闘する人々が描かれており、そこにはジェントリーからの脱落に対する彼女自身の切ない危機感が潜在していたと思える。

一方、ユニテリアンの家庭に育ち、同派の牧師と結婚したギヤスケルには、オースティンのような階級的危機感を感じられない。非国教徒であったため、社会の主流ではないという意識が元よりあったであろうし、同派の聖職者には階級がなかったことから、身分社会を積極的には肯定していなかったことが推測できる。ユニテリアンは19世紀英国に存在した非国教会派の中でも最も過激であり、万人が可能性を追求する権利を主張し、別のグループへの従属を否認する宗派であった。また、ギヤスケルはダーウィンと遠縁関係にあったし、彼女を育てたホランド家は、同じユニテリアンであったウェッジウッド家と親交があった。このように英国の近代化を主導した「ルーナー協会」⁶の家系との交友があったギヤスケルが身分制度を否定し、自力で生きる道を模索するプロフェッショナルや企業家に価値を認めるのは当然であろう。また、ホランド家が博物学で著名であったこと、ユニテリアンはルーナー・グループとの関わりから見て科学的発見を歓迎する宗派であったばかりか、『創造の自然史の痕跡』は非国教の中でも彼らに人気があった(Hensen, "History" 14)ことを考慮すると、ギヤスケルが進化論の影響を受けていた可能性は高い。そして、『北と南』の逆境を克服して工場主となるソーントンの姿には、明らかにスマイルズの自助の精神の影響が認められる。このようにギヤスケルの作品はヴィクトリア朝中葉以降に大きい影響を与えた自助の精神と進化論という能力主義を内包する思潮を反映しているのである。また、ソーントンに理想的な人間像を付与しているのは、ギヤスケルの革新性だけでな

く、商工業の力がオースティンの時代より増し、ジェントルマンとして扱われる時代の到来をも示している。しかし、エリザベス・ベネットの伯父夫妻が信頼できる人柄として描かれている点から、オースティンも身分を人間の判断基準にしていなかったことが推論できる。『マンスフィールド・パーク』と『妻たちと娘たち』、そして、『高慢と偏見』と『北と南』など共通点が多い作品を生み出したオースティンとギヤスケルは、身分や出自ではなく個人の資質を重要視していることも共通しているのである。そこには、英国で伝統的に見られるように、裕福な非地主階級との縁組によりその活力を取り込み地主階級が再生を図ってきたことが逆転し、能力を重視して上から下へと下降しながら上昇気流に乗ったエネルギーに身を投じ、さらに飛躍の機会を求めていった様が反映されているように思えてならない。

注

本稿は第 21 回日本ギヤスケル協会全国大会 (2009 年 10 月 4 日、日本大学) におけるシンポジウム「ギヤスケルと英国小説の伝統」での発表に基づき加筆したものである。

- 1 ジェントリー同化願望に関しては **Wiener** に詳しい。
- 2 プロフェッショナルとの結婚には彼らに対するオースティンの評価が見て取れるが、それは彼女自身の階級であった。父と兄二人は牧師であったし、海軍軍人の二人の兄弟のうち兄フランシスは提督にまで上り詰め、ナイト爵位まで授与されているし、弟のチャールズも少将に昇進している。オースティンは父と兄弟の職業が持つ真正の価値を描いているのである。不労所得ではなく、自らの才能と努力により運命を切り開くプロフェッショナル・クラスを高く評価していたものと考えられる。
- 3 両作品の共通点に関しては拙論 “Fanny Price and Molly Gibson: Bearers of the Country-house Tradition” を参照されたい。
- 4 『高慢と偏見』でもジェインが結婚するビングリーは新興中産階級である。ビングリー家は北部で父が商業で成功し、息子がカントリー・ハウスを手に入れ、ジェントリー化する過程にある。従って、ジェインは商業で身を興しジェントリー化しようとする家にジェントリーから嫁ぐのである。

- 5 オースティンの作品には遺産相続権に関する女性の不利な立場が描かれている場合が多い。父の死後、オースティンが母や姉と暮らすことになった際の生活費、約 500 ポンドはダッシュウッド母娘の場合とほぼ同額である。加えて、オースティン家そのものが「ジェントリーの境界線」(Fergus 5)にあり、同家の子供達の一生が例証するように、社会的な身分の変化は現実には起こりうることであった。父の死後は兄弟の庇護に頼ることも多かったオースティンが、小説を書き収入を得ようとしたのも納得できよう。実際、コープランドによると、「オースティンは土地を所有するジェントリー、またはペンバリーののような豪壮な屋敷の持ち主の一員として物語を書いているのではない……そうではなく、いくらか低い地位で、歴史家デイヴィッド・スプリングが〈擬似ジェントリー〉と呼ぶ階層の一員として書いているのである—つまり田舎の上級プロフェッショナルの家族の一員として」(Copeland, *Companion* 132)。
- 6 1765 年から 1813 年にかけてバーミンガムで開催された知識人、実業家、自然科学者の集まりで、メンバーにはマシュー・ボールトン、エラズマス・ダーウィン、ジョゼフ・ブリストリー、ジェイムズ・ワット、ジョサイア・ウェッジウッド等がいた。

引用文献

- Bradley, Ian Campbell. "Titus Salt: Enlightened Entrepreneur." *Victorian Values*. Ed. Gordon Marsden. New York: Longman, 1990.
- Briggs, Asa. *Victorian People*. 1954. Harmondsworth: Penguin, 1980.
- Copeland, Edward. "Money." Copeland and McMaster 131-48.
- . "Money." Todd 317-26.
- Copeland, Edward and Juliet McMaster, ed. *The Cambridge Companion to Jane Austen*. 1997. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- Davis, Jon. "Meritocracy in the Civil Service, 1853-1970." *The Rise and Rise of Meritocracy*. Ed. Geoff Dench. Malden, MA: Blackwell, 2006. 26-35.
- Desmond, Adrian. "Evolution before Darwin." *The Victorian Studies Reader*. Ed. Kelly Boyd and Rohan McWilliam. London: Routledge, 2007.

- Ellis, Markman. "Trade." Todd 415-24.
- Fergus, Jan. "Biography." Todd 3-11.
- Gaskell, Elizabeth. *My Lady Ludlow and Other Stories*. 1859. Oxford: Oxford UP, 1989.
- . *North and South*. 1854-55. Harmondsworth: Penguin, 1981.
- Hatano, Yoko. "Fanny Price and Molly Gibson: Bearers of the Country-house Tradition." *The Gaskell Society Journal*. 10 (1996): 92-101.
- Hensen, Louise. "History, Science and Social Change: Elizabeth Gaskell's 'Evolutionary' Narratives." *The Gaskell Society Journal*. 17 (2003): 12-33.
- Keymer, Thomas. "Rank." Todd 387-96.
- Kucich, John. "Intellectual Debate in the Victorian Novel." *The Cambridge Companion to the Victorian Novel*. Ed. Deirdre David. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 212-33.
- MacDonagh, Oliver. *Jane Austen: Real and Imagined World*. New Haven: Yale UP, 1991.
- McAleer, John. "Morality and Social Distinctions." *Issues of Class in Jane Austen's Pride and Prejudice*. Ed. C. D. Johnson. Farmington Hills, MI: Greenhaven, 2009. 65-73.
- McMaster, Juliet. "Class." Copeland and McMaster 115-30.
- Perkin, Harold. *The Origins of Modern English Society*. 1969. London: Routledge, 2002.
- Roe, Nicholas. "Politics." Todd 357-65.
- Southam, Brian. "Professions." Todd 366-76.
- Todd, Janet, ed. *Jane Austen in Context*. 2005. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. 1883. Berkeley: U of California P, 1978.
- Wiener, Martin J. *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1980*. 1981. Harmondsworth: Penguin, 1987.

(筑波学院大学教授)

Abstract

Meritocracy in the Works of Jane Austen and Elizabeth Gaskell Focusing on Cross-class Marriages

Yoko Hatano

The marriages between different classes described by Austen and Gaskell often indicate the transition of the social supremacy from the landed classes to the non-landed classes. In addition to the marriages presented in *Pride and Prejudice* and *Emma* which elevate the social status of the heroines, Austen delineates heroines who marry into the professional classes. Among them is salient Anne's downward mobility in *Persuasion* from a baronet's daughter to a naval captain's wife against the backdrop of the emergence of the professional classes in the age of transition. Marriages with professionals reveal the declining power of the traditional landed classes, foreshadowing the arrival of a meritocratic society.

Gaskell's marriage plots are more diverse adopting couples from lower social orders. In her cross-class marriages can be detectable the influences of the evolutionary theories mainly propagated by Darwin. *My Lady Ludlow* shows the ascendancy of the lower classes through education, hard work and intermarriage as opposed to the decline of the old landed families. *Wives and Daughters*, with its hero modeled on Darwin, presents a second son of an ancient family who attains international reputation by his scientific accomplishment. His union with the daughter of a doctor, a profession then considered unfit for a gentleman, reinforces the possibility of the survival of the ancient family. Thus, natural selection and the advantages of crossbreeding are discernible in both novels. *North and South* not only presents intermarriage, but also reflects Samuel Smile's gospel of work in the characterization of Thornton who has attained his social status through perseverance, intelligence and diligence. Margaret's love and respect of Thornton show Gaskell's evaluation of meritocratic society.

Evolutionary theories and the idea of self-help presuppose a meritocratic society. Gaskell's appreciation of merits are well presented in the three works, which is all too natural for Unitarians who advocate meritocracy. Austen's belief in individual merit, rather than birth, can also be seen in her marriage plots. Therefore, the intermarriages in their works show the transition of supremacy from the landed classes to men of merits.